

第51回「はちしん灌花塾」開催

5月9日(土) 京都大学大学院 人間・環境学研究所教授 山村亜希先生をお招きして、第51回「はちしん灌花塾」を3階会議室で開催しました。

当日は、「八幡城下町の形成～『北町』を中心として～」と題して講義いただき、当金庫の役職員や一般参加の方48名が受講しました。



＜歴史地理学の視点からの城下町の形成＞

城下町は単に大名の都市計画どおりにつくられたのではなく、地域の地質、地形や社会・文化といった文脈に配慮して形成された。

＜郡上八幡の特異な地質・地形の成り立ち＞

美濃地域はいろいろな地層が複雑に折り曲げられたり、互い違いになっているのが特徴で、これはプレートの地殻変動で、海底に堆積したチャートや石灰が隆起し砂岩・泥岩が付着したことによる。八幡城は砂岩だが、周囲に硬いチャート層があり、浸食に耐えた岩盤が吉田川に露呈している。一方で水を通しやすい石灰岩層と断層が豊富な湧水をもたらしている。

八幡町は河岸段丘上に築かれており、人工的な水インフラ整備を前提とした城下町である。

＜戦国・豊臣家の八幡城と「北町」＞

天文10(1541)年東常慶、朝倉氏の来襲を撃退後、篠脇城から赤谷山城へ移転。永禄2(1559)年遠藤盛数、東氏を滅ぼし山頂にあった八幡神社を降ろし八幡城を築城。天正16(1588)年遠藤慶隆転封、秀吉家臣の稲葉貞道城郭を大改修。慶長5(1600)年「郡上八幡城の戦い」後、遠藤慶隆入部、城郭改修。

八幡城は岐阜城や犬山城と同様に「霊山の城郭化」と考えられる。地形に合わせた不正八角形で、穴蔵が存在し、天守と周辺曲輪が一体の連続した構造物の可能性^{しよくほう}がある。織豊系城郭^{けいしやうかく}としては技巧性に乏しい縄張りである。

＜史料「八幡城合戦図」＞

江戸中期(1676年以降)に、敗北した稲葉家の家臣子孫が戦功を顕彰するために制作。誇張の可能性はあるが、城下町の構成は正確で、稲葉氏が郡上を去る直前の町の姿を反映した貴重な史料である。

城下町は「北町」が中心で、「南町」は未完成。吉田川には橋がなく「宮の瀬の渡し」があった。小駄良川には橋が架けられ、大手(正面)が吉田川側から90度転換した可能性がある。「侍町」が大部分を占め、「町口惣門^{まちぐちそうもん}」が描かれるなど軍事都市であった。「町人町」は小駄良川沿いに限定。町家は瓦葺・白壁で描かれ、耐火・格式の高い町並みであった可能性がある。

旧支配者の「遠藤古屋敷」、宗社の「八幡社」、複数の寺院関連名があり、神仏習合の宗

教観、支配層の変遷が読み取れる。

吉田川の南に「南谷町」とあり、東氏の「南谷山城（赤谷山城）」の城下町の可能性が考えられる。

＜江戸時代以降の都市再開発＞

江戸中期の寛文7（1667）年、遠藤常友の時代に大規模な都市再開発が行われ、「南町」にも城下町が拡大した。この時、段丘上での生活に不可欠な水インフラが整備された。

＜現在の「北町」の町並み＞

現在の「北町」は2012年に、四方を山に囲まれた自然環境を活かした城下町で、統一された様式（短冊形地割）を持つ町屋が密度高く立ち並び、湧水を活かした水利施設が一体となった歴史的風致が評価され、重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

「北町」の歴史は古いが、現在の町並みは江戸時代のものではなく、大正8（1919）年の大火後、統一的に再建された災害復興の町並みである。

＜まとめ＞

最後に先生は、「現在の町並みの中にも、チャートがむき出しになった岸壁やそこを削って水辺へ下りる階段、『岸の剣山』の残丘、宗祇を見送ったとされる故事にちなんだ『宗祇水』『宗祇屋敷』と『宮の瀬の渡し』などシンボリックな風景が残っており、次回はこちらのポイントを押さえながら、『北町』を歩こうと思います。」と締めくくられました。

